

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橋女子大学図書館 小林倫道気付
(Tell) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

私たちの研究活動 第1報

サイテック・リブの会をつくりました

竹村 心 (京都大学教育学部図書室)

エッ?! 理工学図書館が51%も

日本の高等教育における図書館(室)を主題別に分類すれば、なんと理工学図書館が全体の51%も占めている事実をあなたはご存じでしたか。日本の大学生の中で、工学部に所属している学生は全体の19.5%を占め、社会科学系学部にも所属している学生40.5%に次ぐ多さです。

また、大学院生に至っては、修士課程では工学47.9%、理学10.3%と第1位、第2位を占め、博士課程では、保健37.3%、工学20.6%、理学12%と第2位、第3位を占めています。

人気のない理工学図書館

大学における教育・研究活動にこれ程の分野を占めながら、図書館の利用は最も少ない分野になっています。さらに、工学研究者は図書館サービスをあまり期待していないというデータさえもあります。

なぜなのでしょう。理由はさまざま考えられます。しかし、こうした傾向は決して日本だけではありませんでした。図書館活動の先進国アメリカでも同様でした。アメリカの理工学図書館の歴史も1960年以降急速に発展し、今日の図書館活動を生み出したというたかだか40年の歴史です。

それにしても、日本の理工学図書館の「低迷」は大学図書館員にとって無視できない不名誉な状況ではないでしょうか。

目次	伝言板「あげます」……………3頁
	第2回京都図書館大会に参加して (堤美智子)……………4頁
	思想の生成過程(篠原俊雄)……………5頁

理工学図書館のネットワークを

日本にも医学分野に医学図書館協会がありますが、理工学分野には理工学図書館協会は勿論、協議会すらありません。

したがって、理工学分野の学生・研究者の情報要求や図書館利用実態が総合的に明らかにされて来ませんでした。利用者研究に基づく利用研究があまりなされて来なかったことは、図書館サービスの充実にとって決定的ではなかったかと悔やまれます。

理工学図書館の組織や人員、施設や財政・運営は理工学系学部の組織、人員、財政、施設に較べ非常に貧弱です。最近、ようやく私立大学の理工学系学部に図書館施設としてはすぐれたものが出来てきました。理工学ブームも去って、遅すぎた感もありますが、どうやら、日本ではこれからなのかもしれません。

今こそ、理工学図書館と図書館員はネットワークを組むときではないでしょうか。

Sci-tech Lib の会をつくろう

こんな思いでいたとき、雑誌 Science & Technology Libraries 第12巻4号および第13巻1号が“Sci-Tech Libraries of the Future”を特集しているではありませんか。若い図書館員とこの論文を読みながら、日本の理工学図書館の現状と未来を語り合いたいと考え、Science & Technology Libraries の略称 Sci-Tech Lib の会をつくろうと思立ち、10名の図書館員に、正月休みに10ページ程翻訳しませんかとよびかけました。

英文和訳は大学卒業以来だという若い図書館員や、自動翻訳機で翻訳してみてもと提案して来る計算機センター図書館員、年末年始はモロッコ旅行するので、提出期日を引き伸ばしてくれと依頼してくる図書館員とさまざま。なにか楽しくなりそうな予感がしてきました。

そんな中、ひそかに自動翻訳に期待していた私は、自動翻訳のレベルがまだ実用に耐えない現状を知り、あわてて翻訳にとりかかり、毎日七転八倒しています。でも、翻訳は右脳を使うらしく（俗説に過ぎない）気分転換には持って来いの作業ですが、これもはじめのうちだけ。期日が迫ってくると、自分の語学力のなさにイライラしてきます。

Electric news system で読書会を

翻訳に参加した図書館員は吉田、北白川、宇治、草津と勤務地がバラバラなので、electric news system（電子掲示板システム）を使って、読書会がやれないだろうかと現在検討中。最近手紙を書かなくなったので、投書の手紙を書くつもりでやり取りできないものかと思案していますが、そんなの味気無いという40代も訳出に頑張っています。

いづれにしても、全員完訳してからの相談です。

こんなオモロイ研究会に図書館が大好きな君、参加してみないか。
理工学図書館大好き人間大集合！

乞う、連絡。竹村 (075-753-7531内線3015)。

ちなみに、こんな論文が訳出されます

- ・ The Needs of Science and Technology.
- ・ Managing the Sea Change in Science and Technology Libraries.
- ・ Scientific and Technical Librarians : Leaders of the 21st Century.
- ・ Leadership in Science-Engineering Libraries
: Considerations and Realities for the Future.
- ・ Library Buildings : Their Current State and Future Development.
- ・ The Future of University Science and Technology Libraries
: Implications of Increasing Interdisciplinarity.
- ・ Knowledge Diffusion and U.S. Government Technology Policy.
- ・ Collection Development vs. Access in Academic Science Libraries.

大図研

伝言板「あげます」

「経済学文献季報」バックナンバー (未製本、未登録、蔵書印なし)

(在 庫) 54-58, 62-78, 80-86, 88-94, 96-98, 100-121号

(申 込 先) 同志社大学人文科学研究所 竹本まで ☎ 075-251-3940

(条 件) 希望号数を明示すること
郵送の場合は郵送料を負担すること

第2回京都図書館大会に参加して

堤 美智子 (京都大学人文科学研究所)

一昨年から始まった京都図書館大会の第2回大会が12月3日(金)の午後、京都府立総合資料館で開催されました。京大の職員としては珍しく出張の形で参加することができました。テーマはネットワーク時代における図書館サービス。プログラムは基調報告が大城善盛氏(同志社大学教授)。若井勉氏(我らが京都支部会員・日図協評議員)のコーディネートで事例報告が田口政広氏(田辺町立中央図書館)、松原修氏(我らが事務局長)田中登茂子氏(伏見中学校・京都府学校図書館協議会事務局)、中里隆憲氏(八幡高校・京都府立高等学校図書館協議会)、江尻裕樹氏(京都ライトハウス点字図書館)。総合司会は尾上日出丸氏(八幡市立男山市民図書館)で、この大会の実行委員長橋本實氏と日図協から酒川玲子氏のあいさつがありました。

基調報告では、生涯学習社会という視点から学校図書館、公共図書館、大学図書館等の協力の重要性、神奈川県内大学図書館相互協力システム(34国公私大)の例から全国規模や外国ともネットワークを組むことの可能性、また学校図書館は図書館、情報センターの機能に接触する出発点であることなどの要因から京都府図書館協議会、京都府図書館協会の現代的意義を話されました。

松原さんの報告は我々大図研の会員としてはおなじみのNAC S I S - I L Lの話、文献複写、貸借の現状、関西4私大の相互利用制度等についての話でした。公共図書館、学校図書館等からの参加者は、自館の蔵書ではまかないきれない学術雑誌等の資料の宝庫としての大学図書館を利用するには?という興味を持たれたかと思います。

公共図書館、学校図書館の報告は、同種の図書館間では協力活動があり、読書感想文コンクール、本に関係する絵画展などの催しものも行われているが、異種館間での協力はまだまだという感じです。田辺町立図書館では土地柄、同志社大学との協力が行われているようですが…。協力活動とは別に、学校図書館では図書室に専任の司書職員や教員がいないのが最大の問題点だという感がありました。まだまだ熱心な先生方や本好きな生徒たちのボランティアで図書室が運営されているという状況のようです。大城氏のレポートにもあった様に、図書館というものに最初に接するポイントの一つがこれでは大学図書館に働くものにも大いに影響があることだと変な納得をしてしまいました。京都ライトハウスの報告は府下の公共図書館に対して行われた障害者サービスに関するアンケートについてでした。大体の公共図書館は施設面ではほぼ利用の条件が整っているようですが、障害者手帳交付数から比べると図書館への登録数が非常に低調であるとのこと。まだまだ図書館側が受身のサービスしかできていないということでしょうか。障害を持たない人でも「いったい京大の図書館を一般市民が利用するにはどうしたら良いのですか」という質問をよ

思想の生成過程

— 「アダム・スミスを語る」を学問の方法論として読む

篠原 俊夫 (京都大学法学部図書室)

日本におけるアダム・スミス研究は、世界でも第一級の水準にあるとされている。日本人の多くが受験勉強の過程でアダム・スミスの「国富論」という書名になじみ、大学の経済学部に進学するようなことがあれば、英書講読のテキストとして遭遇する機会も多い。

アダム・スミスについて、特に関心のない人でもピンの生産過程を例にとった分業の概念の説明や、経済人の利己的な経済活動が、「視えざる手」に導かれて、無用な統制がなされなくとも、一国に富裕をもたらすというスミスの基本思想は、記憶に残っているかも知れない。それくらい日本人とスミスの係わりは深いと言えるのである。

「アダム・スミスを語る」と題された本書も、1990年4月に名古屋に開催され、国際的にも好評だったとされる「アダム・スミス没後二百年記念名古屋国際シンポジウム」をきっかけとして企画されたとあとがきに記されている。この大会で実際に報告された「日本におけるスミス」は、日本の著名なスミス研究家に聞き取り調査を実施した結果にもとづくものである。話し手にあげられているのは、高島善哉、出口勇蔵、小林昇、水田洋の諸氏であり、聞き手は水田洋、杉山忠平、大森郁夫、坂本達哉、田中秀夫、竹本洋である。

表題からも想像されるように、この本は気鋭の研究者達が自己の学問的方法論や研究史を語りあったものである。交わされる言葉は穏やかであるが、学問的方法論や資料の読み方について、厳しい批判を含んでいる場合もあるし、切り結ぶ言葉が火花を散らしているかに思える場面もある。

私自身も大学の経済学部の英書講読でスミスの国富論を読まされた記憶がある。怠惰な

— (前頁より) —

くされます。この会でもやはり、この質問がでました。参加者の中で京都橘女子大の武内氏が「京大附属図書館では学外者が利用できる様になっているはずです」と解説して下さい。このような状況なので必要な資料が京大にしかない時、その利用者が障害をもっていたらどんなに利用困難な思いにとらわれるだろうかと、それこそ受身の立場で考えてしまいます。

この大会のテーマであるネットワーク (平たい話が協力だと思うのですが) とは又別問題ですが、大図研が大学図書館すべてメンバーとしている様に、京都の図書館であれば京都図書館協会のメンバーであるという日が来るのを望んでいるのはこの大会参加者だけではないと思います。

経済学部生であった私は、昔は経済学をやった義理があるからという程度の意識で卒業後もつかず離れず、経済史や経済思想史関係の本を読み続けきた。従って、ここで繰り広げられる対話や討論の多くについて、十全に理解するためには、私の経済学に係わる専門知識が不足している。しかし、スミスの研究家でなくとも、経済学の門外漢であっても、思わず引きずり込まれて、読まされてしまうような力が、この書物にはある。

どんな学問分野にかかわろうと、学問的課題を追求することが、自己の生き方を問うことと同義である時があるはずである。経済学は人間の世俗的な営みを学問の対象としてきただけに、象牙の塔にたてこもって学問の純粋性を貫くというわけにはいかない。経済学者は時には、現実の経済現象に対する経済学の有効性を、時には、純粋な学問的成果として表現された理論と生身の人間としての生き方との係わりについて自問することがあるに違いない。この書物に登場する経済学者達が、自己の学問の方法と生き方について語る時彼等は一様に真摯で率直である。学問的方法論をめぐる厳しく対立し、批判しあうことは彼等にとって当然のことにすぎない。「経済学の系譜のなかで」と題する第3章は、小林昇を話し手として展開するが、内田義彦のスミス研究の方法について、小林は真っ向から批判する。

「スミスはむろん自分の思想を長いこと苦勞して練り上げたんですけれども、『国富論』を書く時には内外の経済学の本もたくさん読んで勉強したんですから、そのところが欠落してはスミス研究にはならない、まずそのように思ったわけです。これは要するに研究の分担です。内田君は非常に総合的な見解をもっていたけれども、どんなに総合的な見解をもっていたとしても、彼は古版本はほとんど全く読まずに、経済学はケネーなりスミスなりから始まり、重商主義に対する批判から始まるというような簡単なお題目的な前提で学史をみている。だから、学史を部分的にしか読んでいない。それならば、ぼくは学史家として、『国富論』を読む作業をひとつ本格的にやってみようじゃないか、と新たにこう考えたわけです。」

これは自己の学問的方法論に対する確信であり、内田のそれに対する全面的否定とも受け取れる表現である。同じ第3章のなかで、大河内一夫との係わりについて、語っている部分がある。

「ぼく自身に物を相対化してみる体質があるんじゃないか、あまりこれだけがと一生懸命思っている人は閉口だなという感じをもつタイプの人間だということだと思います。大河内先生なども比較的そういうタイプで、ぼくはいろいろ批判したり反対したりしているけれど、そういうことは全然気につけられなかったですね。あの先生は大人で、そういうことは気にもとめられなかった人ですね。ぼくは大河内さんの『スミスとリスト』に対してはスミスの賃金論についてのところは納得できないということと、リストについては『国民的体系』しか読んでいないということをはっきり言ってるんですが、先生はご自身の五冊本の方の著作集の『スミスとリスト』の解説をぼくに書いて下さいと言われた。そういう人です。」

ここには、学問の世界では、批判し克服すべき対象であっても、同じ学究としての友誼



に隔てはないという互いの了解がある。

原典主義ということに関して言えば、個人が生涯に読むことができる文献の量に限りがある以上、経済思想史の分野で研究をすすめる時、どこまで原典にこだわるべきかという問題がある。先の小林の内田に対する批判も、内田がスミスの学説の背景にあって、重要な意味を持つ古版本を丹念に読み解くという地味な努力を惜しんで通り一辺の図式的な理解ですましていることへの批判である。ただし、原典主義と一口に言っても、原典にどこまで固執して読むかという点については、経済学史や経済思想史の分野にかぎらず、困難な問いに違いない。あくまで一般論にすぎないが、勤勉だがありあまる力量にめぐまれているとは言えない研究者にとって、圧倒的な文献の前に挫折して、ひたすら読むことに追われているうちに、研究者としての生涯を終えてしまうこともありそうなことである。

山なす文献をものともせず、さながら阿修羅のごとく、千切っては投げ、投げては千切りというように、軽々と読むべきものを読み、強靱な胃袋で消化し、新たなものを生み出してゆく。これは学究のあるべき姿かも知れないが、たやすい道ではない。

原典主義とも無関係ではないのだが、経済思想史の山脈のいくつかの高い峰に相当する思想的な巨人については、その思想と人間の形成過程の再構築が試みられることが多い。

第4章の思想史遍歴のなかで、水田洋は、思想史の課題は個別の伝記を書くことにあるのではないという自説を語っている。なぜなら、日本人が外国の過去の思想家に伝記的方法でせまろうとしても限界があり、かつ資料への埋没がおこる、仮に埋没しないで、うまくいっても、歴史の流れは切断される。ひとりの人間の生活でも、ひとつの理論でも、そこに深く入っていくことと、歴史の流れをたどることとのバランスがむずかしい。だから水田は、固有名詞ぬきの思想史でなければ、概論としての思想史は書けないと考えたのである。また、伝記的手法に深入りした結果、細密な思想史的伝記が描かれる。しかし、問題は、どんなに人物描写が細密をつくしても、そこには必ず嘘が入ることにある。日常生活のディテールが歴史を隔てた現在において、分かりようのない以上、人間像の厳密な意味での再現は、文献を読み込むことによっては不可能であり、そうである以上は、伝記はそのままでは、思想史としては、なりたち得ないというのである。これはかなり重

要な意味をもつ指摘である。思想の本質は、その思想のバックグラウンドを形成する個人の私生活や言動がどうあれ、最終的に書き残されたものによって判断し、評価することしかなれないということの意味する。

水田洋の「知の風景」(筑摩書房 1988年)のなかでも、この問題がとりあげられている。同書の最終章にあたる「思想史の書きかえ」がそれである。「(前略)人はそれぞれのカントを読む、といわれるように、古典に自己を投影するのだから、原典にあたらないうで感動していると、その投影に感動したことになり、感動の中間搾取が行なわれる。(中略)読者=研究者の自己投影という点からみれば、研究者には、研究対象(ここでは過去の思想家)への低い評価を自分への低い評価と思い込んで、自己弁護をかねた反論をするという、奇妙な習性があり、その一変種として、研究対象の欠陥(矛盾、不徹底など)を自分のそれとひきくらべて、自己を正当化したいという願望がある。もともと、対象にほれこまなければ、その研究にうちこむことなどできはしないから、はじめは「あばたもえくぼ」に見えてもしかたがないのだが、そういう段階を越えなければ研究はなりたない。」

「アダム・スミスを語る」を思想の形成過程のなぞ解きとして読んでみるという試みはあまりうまく行ったとはいえないが、与えられた紙幅をとうに使い果たしてしまった。

前掲の水田洋著「知の商人」のあとがきの言葉を引用して、おわりとしたい。

「トータルな思想史ということばには、もうひとつの意味があって、それは、あれこれの思想の社会的文脈をさぐるだけではなく、思想史としての歴史的全体をとらえようということである。横(同時代的)にも縦(歴史的)にも総体をとらえるというのは、じっさい絶望的な仕事であるが、放棄することわけにはいかない。(中略)ここから、固有名詞のない思想史までは、無限の距離があるけれども、これもまた、いつかは歩むべき道である。」

アダム・スミス研究を軸とする思想史の分野で、世界の最先端にあるという自負が水田の謙虚な言葉の裏にはある。自分が絶望的な作業に耐えられなければ、世界の思想史研究の発展もありえないという、ここから先は書かれることのない水田の無言の声を聴けばよいのである。

今回書評の対象として取りあげたのは、昨年刊行された水田洋・杉山忠平編の「アダム・スミスを語る」(ミネルヴァ書房、1993年)だけであるが、過去に水田洋によっていくつかの思想史の本が書かれているので、参考のため掲げておいた。

(関連文献)

- 水田洋著「知の商人：近代ヨーロッパ思想史の周辺」 筑摩書房 1985年
 水田洋著「知の風景：続・近代ヨーロッパ思想史の周辺」 筑摩書房 1988年
 水田洋著「思想史の森の小径で」 秋山書房 1985年